

『豆太郎物語』（ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵）翻刻（下）

中井賢一

本稿は、ノートルダム清心女子大学附属図書館特殊文庫内「黒川文庫」蔵『豆太郎物語』の翻刻を試みたものである。同書の書誌、【翻刻A・B】の別、【凡例】等は、本稿「（上）」を参照されたい。但し、「【凡例】六」のみ、次の通り、第二文目を加えたものに訂する。

【凡例】

六 【翻刻A】について、「句読点様の書き入れ」は、当該箇所「」で示した。また、三三丁以降の不規則な濁点は、本文の表記通りとした。

【翻刻A】

（挿絵）（二〇丁ウ）

草のまかき

春もくれ夏も過ぎ、草のまかきの花の露、夜ことにふみちらすものあり、何のわざともしらす、君か手つから植し萩薄折れふしぬ、いと心うしとわひぬれと、いか、はせむ、まめ太郎あやしみ、目に見へぬ鬼とやらんなしらす、かたちたにあるものならば、なに、もあれ、からきめ見せてくれん」（二二丁才）ものそとはかまたかくく、り、夜ことにまかきのあたりに立かくれぬたり、そのころ北山に逆波といふぬす人あり、人にたのまれて、常世の君をぬすみいたさんと夜な／＼きたりけるか、矢つまより弓すひきするをとなときこへければ、あはや用意ありけりとえいらて、た、うか、ひて夜ことにかへりし

なり、今宵も又来り、まかきをこえ、床の』(二二丁ウ)

下にく、まりゐて、内のやうをうか、ひたり、

すはや此ものなりと大針もて、ぬす人の

こゝろもをつく、大きなおをのこなれとも、きも

きえ目くるめき覚えず、やゝとこゑをあけ、

はい出る事もならずておう／＼といふ、その

ひまに太郎ははしり入り、しか／＼といふに、

男ともつとひ来り、やかてからめてうつたへ、

ぬす人はかしらきられぬ、長者いよ／＼太郎を』(二三丁オ)

あはれみけり、かくて君になれ行まゝに、太郎は

物思ひとなりければ、つゝみもあへぬ袖の露、

古里やこひしきなど、人／＼とひなくさむ、

はしめ父母もなしといひければ、古郷へかへ

さんともいはず、たゝこゝちあしくなやむと

のみ思ひはかりて、いかにせむと君は心まと

ひす、日にそひて面やせ、いとゝそたつへし

とも見えず、太郎あさましと思ひかへせと、』(二三丁ウ)

やるかたなき思ひにこかれて、

神のます

草葉にむすふ

常世の国を

しらたまの

たつね来て

露はかりなる

身のほとを

花の下ふし

深ければ

幾年月を

関こえて

駒もかけそふ

秋ふけて

日影まつまの

神ならて

こゝろの水の

しはふねの

身をのみかこち

いかにかはせん』(二三丁ウ)

反哥

たつねこし常世の花の陰にねて

かたしく袖にむすふ恋くさ

恋くさ茂りゆくまゝに、いとゝ露けし、くれ

はつる秋の雲の行末、時雨をさそふ風の

身にしみて、こゝちもなやましとたれこめ

てうちふしぬ、君はいとあはれかり、さま／＼に

なけかんとこそ 思ひしに

いつとなく うつす色香の

袖も露けし 恋ころも

かさねてか あふ坂山の

引つゝくるや きりはらの』(二三丁オ)

もちつきの かつらのさとに

垣ねに残る あさかほの

身のほとを 誰にかたらん

たれかはとはん わきかへる

うきしつみ こかれこかるゝ

しはしもたゝぬ 我おもひ

深き江に しつみはてなは

なくさむれと、た、歌をのみよみて、ありけ』(二四丁オ)

(挿絵)』(二四丁ウ)

れは、つれ／＼なる折ふしは、みな／＼つとへ
哥なんよみてなくさめける、

哥あはせ

神無月中は、時雨の空のふりみふらすみ
はれやらぬ心のつれ／＼に、哥合して太郎
か心なくさめむと山によする恋といふ題
を出し、判者は廣沢にすむ人をむかへ、右
左をわけ、ついで／＼にかちまけありて、』(二五丁オ)

読人の難ちん、判者の批はん、さま／＼にて、
おもしろきなとはおろかなり、あまたの
哥はもらしつ、まめ太郎左、君かそは、
なれぬ、あや子といふ女は右とつかひし、
二首の哥に、

左勝

豆太郎

きえやらてふしのけふりに立そひぬ

したにこかる、あまのたく火も『注』』(二五丁ウ)

右

綾子

おもひくさつもり／＼てちりひちの

やまよりもなを^はふかきこ、ろに

右の方なんして曰、寄山恋と

いふにふしのけふりを詮によみ

たらは寄烟恋とも題かへてん

める

左の方ちんして曰、後京極殿の』(二六丁オ)

哥に、寄山恋といふ題にて、

きえかたき下のおもひはなき物を

ふしも浅間もけふりたてとも

とよまれたるは、証哥とはなるまし

くや、

左の方なんして曰、山よりもなを^は

深きこ、ろといふ、かへりてあさくや、

右の方、はしめより左の哥まされり』(二六丁ウ)

と思ふ心にや、ちんしなし、

判に曰、右の哥つもり／＼てのことは、

み、にたつやうになん、又左のなんの

こと／＼山よりもなを^はふかきこ、ろに』(注)と

山のかきをいひかけたる、つねならは

そゆるすかたもはへらんか、大かた

ふかきをふかきとはにあらはし

たる、なんなしとせず、左の哥に『(二七丁オ)

富士のけふりに立そひぬといひ

さためたるこゝろふかし、下にこかる、

けふりなれとも、きえやらすは富士の

煙にも、立そはさらめやは、きえやら

ての五文字、心つくされしとおほゆ、

又とりあへず、証哥いたされたる、

左きはめたる勝なり、

人く太郎かちたるをめてつゝ、日ごとに『(二七丁ウ)

此事をのみかたりあへり、されと思ひは

まされとも、なくさむへくもあらず、あまりに

物もくはす、つれくけなれば、君たちはなの

みを、手つからしほり、ちゆさきしろかねの

ひさけにいれてやる、

たちはなのみつからむすふ露しつく

かほりをそへよ君かこゝろの

身にしむ露のなさけ、すこしなくさむこ』(二八丁オ)

こちしけり、紅葉のはにかへしかきて、

たちはなの花ならねともかほるなり

きみかこゝろのつゆのめくみは

これや来にしをむすふはしめそとこゝろ

にうれしく、こゝちもすこしをこたり、君も

よろこふ事かきりなし、

こひの山路

いつまでかく思ひこかれんと思ひめくらし、』(二八丁ウ)

長岡に年ころのものあり、我をそたて

たる者なり、ゆかしくはへるなり、こゝちも

をこたりぬ、行て見まほしくはへるなり

とねかふ、君心のまゝにせよと女わらは男な

とそへてやりぬ、

思ひ入る恋の山路はふかくとも

しほりもとめてこゝちさらめやは

かく思ひつゝくる心やるかたなく、かつらの』(二九丁オ)

(挿絵)『(二九丁ウ)

里を出て、長岡にいたりぬ、三太にあひ、先

父母はいかにやすくましますや、さそなこひ

しとおほすらん、三太父母は三年になる

を、いつかゝと待たまふなり、さていかゝした

まふそや、とくかへりたまへといふ、太郎ことの

ありさま、しか／＼とみそかにかたり、我身も神のめくみにて、たけたかくなるへし、

されと三年をすこすほとなれは、いとまち』(三〇丁オ)

久し、又桂の長者の娘を我つまにせんと

思へと、かゝるすかたの者には、めあはすへし

とも覺えず、我たけの、ひんまては、人も

またし、我よく内の手引せんに、此君を

ぬすみ出し、丹波路の山中までくして

ゆけ、あとより我行て追つかは、あやし、神の

まもりめありとおほめきおそれて、君を

すて、にけかへれ、かほに丹ぬり見しられぬ』(三〇丁ウ)

やうにかまへよ、我は君をとみなひ、山路に

まよひたるやうにして、こゝに來りやとり

て君をしはしなれにあつけなん、かゝる事

なしてんやといふ、三太うなつき、それいと

やすき事なり、よくしてんといふ、太郎うれし

く、夜をさため時をちきりて立かへる、

かくてその夜にもなりぬ、三太夜うちふけ

しのひ入る、太郎手引して内へいれ、君』(三二丁オ)

か声たてぬやうに、きぬともとりかけて

おふてゆく、君はこはいかなる事とたまし

ひもきゆるはかりなり、三太はたゝはしり

にはしりゆく、太郎よく／＼見送りかへり

入て、君の見^えへたまはぬとの、めく、家の内

おとろき、お^をのこともかしここゝ、たつねもと

むれとかひなし、太郎いふやう、これは人

のぬすみ出しま^ゐいらせたるならん、われ』(三二丁ウ)

たつねま^ゐいらせんといひてはしり出ぬ、か

ねてちきりし山路に行て見れば、残る夜も

あけわたり、木深き松陰にやすらひゐたり、

太郎はしりいて、君かそはへよるを見て、

三太あはやまのりの神のあらはれたま

ふよといひてにけうせぬ、君はわれかの

こゝちして、涙せきあへす、されと太郎か

とく來るに、ちからをえて、深き山路な』(三三丁オ)

とも、おそろしけもなし、太郎こゝは丹波

路なるへし、はやく長岡へくして、ま^ゐいら

んとゆくに、道たと／＼しく、あらぬ

方にゆきまとひて日もくれかゝり、時雨

さへふりきぬ、みねをこえ、谷にくたり、夜

のまきれに山深きほらにいたりつく、

いぢ間のはな

いみしくおそろしきほらのうちに、』(三三丁ウ)

ほかげ見^えなければ、太郎いふやう、鬼の

こもりたらばひはたかじ、山人のすみかな

らむやどりかりてん、君はこゝにまちたまへ

とほらに入て見れば、七十あまりのうば

の火たくなり、太郎はしり出て、君に

かくとつぐ、君よろこびうちに入り、やどり

かしたまへといふ、うばおどろき、こゝは人の

来る所にあらず、いづくへゆくとて、きたり』(三三丁オ)

(挿絵)』(三三丁ウ)

たまふぞ、こゝはおそろしき鬼のすみかなり、

月花のやうなる人の、いかでやどりたまはん、

此山をとくこ^えこ^えて、人里へ出たまへといふ、君は

いとかなしく、さはいかにせむとこゝろまどひ

す、太郎うばがそばへより、我はまめ太郎

といふたけきものなり、たとひいかなるお

にもあれ、めにたに見^えたらば、からきめみ

せむ、うばぜも、鬼か人かといふ、うばみて』(三四丁オ)

や、ちい^ひさき人かな、されどこゝろはけにま

すそや、うは、おに、はあらず、此ほらの

あるじに、おつとをくはれたりといふ、さら

ばそのおにをころして、うはぜのかたきとり

てんはいかに、うばいみじくよろこび、あるじ

も誠^{まこと}の鬼にはあらず、ぬすびとなり、うば

がおつと、このほらにかくれすみ、うしろの

谷より水にながるゝ、すな金をとリ、世を』(三四丁ウ)

やすくへしに、ぬす人これをしりて、わがお

つとをころし、かねいせさせんと我をばころ

さず、又人にしられじと鹿の角に馬の

たてかみをつけ、かしらにいたゞき、身も

くまのか^はもてくるみ、鬼のかたちにしらへ

て、すなかねとりにゆき、つねに夜ふかく

かへるなり、ほらのあたり見たまへ、しゝさる

をきりちらし、鬼のこもれるやうにし』(三五丁オ)

ければ、人もこず、おもへばつまのあたなり、

こよひさけのませ、よひふせてんに、かれがま

なこつきつぶしたまはゞ、うばはつるぎもて

さしころしなん、ひめをばおくのい^はぢ間に

かくしまゐらせむといふ、太郎さらばうば
ぜがあたころし、やどせしめぐみむく

いむとて、おにのふしどにかくれるたり、

君をばいঝ間にかくしぬ、太郎、』(三五丁ウ)

あるじにはありとないひそ岩つ、

じ岩間かくれの花のにほひを」(注4) 君は

たゞ我かのけしきにて、いかなるうきめを

か見むとこゝろぎも、きえゆくばかりなり

り、うばは人々(注5)のものほしくやおはさむと

あঝのいゝむしてまうけす、太郎そこら

見め(注6)ぐらせば、すながねつみおきたり、こゝろの

うちうれしく、われこのかねをえて、長者に』(三六丁オ)

なりてん、父母をもやすらかに、やしなひまゐ

らせん、これそ神(注7)のめぐみと大ばり小ばり

とぎ(注8)、夜もや、ふけゆくまゝに、こゝろゆる

びなく、いまぞくゝとまつ、

おにのしこぐさ

暁ちかくなりて、すはやおにぞいで来

たる、なにやらん、だみたるこゑにて、うば

と物がたりして、何げなくものくひさけ』(三六丁ウ)

のみ、今よひはつねよりもゑひたり、やすまふ
なといひてふしどに入り、くるまのとゞろ

くやうにいびきしてねいりぬ、太郎二

つのはりをもて、やをらぬす人のまなこを

つく、あるしはねかへり、目をあけんとすれと、

ちほとばしりいたみしのびがたく、うばせく

火さしあけよ、まなこをむしのいたくさし

たるぞといふ、うばつるぎぬきもて、なにを』(三七丁オ)

(挿絵)』(三七丁ウ)

の、しりたまふぞといひつゝ、ぬす人の左の

むねを束えといひて、のけさまにつきた

をす、おつとのあたなれはころすぞとよぶに、

ぬす人はくちおしをとばかりいひて、おきもあ

がらずしてしにけり、夜もあけゆけば、うば

は君をねもごろにいたはりぬ、太郎君に

これ見たまへ、鬼のしゝたるはとて、

めに見えぬおにのしこぐさかれはて、』(三八丁オ)

いかなるみとかならんとすらん」(注9)とうちわ

らふ、うば、太郎にむかひ、とのはいみじきゆゑ、

しさなり、をおほきくしてまゐらせさせきことぞ、

此山のおくにいでゆあり、世にしる人なし、
このゆにいはは、やせたる人もこゆといへり、
とのも入りてみたまいてんやといふ、さらばとて

日ことに入りぬ、日にそひて引のはすやうに
なりて、たけたかく玉のやうなる男となりぬ』(三八丁ウ)

うはからひつより小袖ひた、れとりいできす、
あはよきとのかな、今よりこのすな金もてゆ

たかにさかへたまへ、うば、年おひ、よはひかた

ふきぬ、ともかくもやしなひてたべかしとわり

なくきこゆ、いかでおろそかにせんとて、よくく

いたはりけり、かくてまめ太郎まつぐんだ

にかくとかたり、ぐ(注10)んだよろこび、のりもの

こしらへむかへぬ、太郎君が手をとりにて、』(三九丁オ)

君やしるふしのけふりにまかへつ、

あまのたく火のしたこかれしを』(注11)と思ひ

いれたるさまなりければ、君もかほうち

あかめ、

今そしるふしのけふりに立そひし

人のおもひのしたこかれとは』(注12)それよりあさ

からぬ中となりぬ、やがてぐん太が家に入り

ひきで物など、と、のへかつらの里へいそぎ』(三九丁ウ)
て行ぬ、

かへる道しは

三とせにもならで、古里にかへるうれしき、
たとへむかたなし、君をのりものにのせて、

我身は馬にのり、遠き山路を分ゆく、太郎

こまをと、め、君に物申すといふに、のり物と、

めて何事のおはしますときこゆ、太郎、

みちしはのみちにもきえぬつゆの身は』(四〇丁オ)

君かたもとにむすふしら玉』(注13)君とりあへず、

露ならてひかりをそふる玉なれば

そて(注14)につ、みてかへる道しは』(注15)やがて長者

にげんざんし、ありしやうつぶさにかたり、

いろくひのひきで物す、人くいでつとどひて、

よろこびなくことかきりなし、ついに太郎

を長者がむこにさだめぬ、それより太郎

五条のみやしる□まうで、ぬさ奉り、』(四〇丁ウ)

めくみありてこのみいつしか生ひ立ぬ

花さく春を猶いのるなり』(注16)こまをはやめて、

京極へゆく、こゝろのうちうれしきなどは、

おろかなるへし、

千代の松かけ

ぐ^(注17)ん太は、いと、く京極にゆきて、かくとしら

せければ、父母いみじくよろこび、はしり

出て見れば、きよなるお^をのこの、きら／＼しく』(四二丁才)

(挿絵)『(四二丁ウ)

馬よりおりてなみたをながす、父母せめての

ことにゆめとのみおもふといへば、太郎ち^ひ

さきひた、れと大ばり小ばりをいだしけれ

ば、いと、うれしく、五条の御神のふかき御

めぐみなりといく度もぬかづく、こひしく

□^行□^(注18)ゑ^(注19)おぼつかかなりしことなど、ものがた

りしもてはやす、ぐ^(注20)ん太が夢のごとく、伏見

のも、ぞのに家つくりし、うきことなく世を』(四三丁才)

すごさせま^あいらせんとかわ^はらけとりて、

其日は父母に酒をす、め、庭の小松をてうし

□^{につ}□^(注21)けて、太郎、

若枝さすみとりもふかくあふくなり

いやますたかき千代の松かけ』^(注22)かくてい^へ

つくるいとなみをぞしける、

か、やく朝日

日かずへて、家もいできぬ、ことしもくれ正月も』(四二丁ウ)

過ぎ、やよひふつ□はよき日とて、父母を

ぐして、も、ぞの、家にうつり、君をもむかへ

て、上下よろこびあへり、三日はひなまつり

す、とこ世の君も、の花、一えだ折て、

くれなゐにか、やくあさひくもらしな

い□^(注23)三千とせかにほふも、その』^(注24)とよみて

ことふく、それより太郎は朝日の長者とて、

世にかくれなく、男女の子、あまたいてきて、』(四三丁才)

(挿絵)『(四三丁ウ)

行^えすえながくさ□□□^(注25)、太郎た、父母に

よくつかへ、夫婦むつましく、こ、ろ^おをほと

かにして、よく人をめくみけり、つね／＼いひ

けるやうは、男はものならへば、を^おのづからよき

ことば^わりをもしる、た、女ばかり、いとけなき

□^{より}□^(注26)ものまなぶことのなければ、かだましき

こ、ろのみまさりて、もの、あはれもしらす

なりゆく、いとかなし、ゆ^え木に物ぬ^いならひ、』(四四丁才)

手かきならひ、お^をとこもじなど、大かたお

ば^え、やまとぶみ、かみよのまき、げんじ物語
□□^{いせ} (注27) 物がたり、代々の (注28) 集 (注29) をよみ、あはれ
なる (※前行コマエ)

哥を覚^え、物ねたみものうらやみせず、
心をこまやかにして、人のいさめにつき、おや
につかへ、夫につかへ、しうとしうとめにつかへて、
何事もこゝろのまゝに、ふるまうべからず、
人をにくめば、□□にくまる、いふましきこと (四四丁ウ)
いひ、すまじきこと□□□、いとはしたなし、
人こゝろなにはにつけてよしあしを

なみの立ゐに思ひわけてよ

年ころむつましくしたる人、年ころ久しく
出入したる人など、わするべからず、
いくとせかふるきのきはにゆき、して

あるしわすれぬつばくらめかな

心のおなじ友あらば、身のよしあしをたゞし、 (四五丁オ)
 (挿絵) (四五丁ウ)

たがひによき道に、いさなふべし、

小夜ちとりうらつたひして月影の

くまなきかたに友さそふなり

おやにつかへ、はらからにむつまじきは、
いふに及ず、なべて年おひせるものをは、
□□^{あは} (注30) れむ心あらまほしけれ、と女わら
はめにをしへけるとぞ、

まめ太郎物語をはり 真道一読了 (四六丁オ)

享保九年甲辰

八月二十三日 (四六丁ウ)

【翻刻B】

(挿絵) (二〇丁ウ)

草の籬

春も暮れ、夏も過ぎ、草の籬の花の
露、夜毎に踏み散らす者あり。何の業
とも知らず、君が手づから植ゑし萩薄
折れ臥しぬ。「いと心憂し」と侘びぬれど、いかが
はせん。豆太郎、怪しみ、「目に見え (注31) ぬ鬼と
やらん、名知らず、貌だにあるものなら
ば、何にもあれ、辛き目見せてくれん」 (二二丁オ)
ものぞ」と袴高く括り、夜毎に籬
の辺りに立ち隠れ居たり。その頃、北山

に逆波といふ盗人あり。人に頼まれて、

「常世の君を盗み出ださん」と夜な夜な来

たりけるが、屋妻^(注32)より、弓素引きする音

など聞こえければ、「あはや、用意ありけり」と

え入らで、ただ窺ひて夜毎に帰りし

なり。今宵もまた来たり。籬を越え、床の』(二二丁ウ)

下に屈まり居て、内のやうを窺ひたり。

「すはや、この者なり」と大針もて、盗人の

心元を突く。大きな男なれども、肝

消え、目眩き、覚えず「やや」と声を上げ、

這ひ出づる事もならずて、「おうおう」と言ふ。その

隙に太郎は走り入り、「しかじか」と言ふに、

男ども集ひ来たり、やがて搦めて訴へ、

盗人は頭切られぬ。長者、いよいよ太郎を』(二三丁オ)

あはれみけり。かくて君に馴れ行くまゝに、太郎は

物思ひとなりければ、慎みも敢へぬ袖の露、

「故郷や恋しき」など、人々問ひ慰む。

始め「父母も無し」と言ひければ、「故郷へ帰

さん」とも言はず、ただ心地悪しく悩むと

のみ思ひ量りて、「いかにせん」と君は心惑

ひす。日に添ひて面瘦せ、いとど育つべし

とも見えず、太郎、「あさまし」と思ひ返せど、』(二二丁ウ)

遣る方無き思ひに焦がれて、

神の坐す

常世の国を

尋ね来て

草葉に結ぶ

白玉の

露ばかりなる

身の程を

嘆かんとこそ

思ひしに

花の下臥

いつとなく

移す色香の

深ければ

袖も露けし

恋衣

幾年月を

重ねてか

逢坂山の

関越えて

引き続くるや

桐原の』(二三丁オ)

駒も影添ふ

望月の

桂の里に

秋更けて

垣根に残る

朝顔の

日影待つ間の

身の程を

誰に語らん

神ならで

誰かは問はん

涌き返る

心の水の

浮き沈み

焦がれ漕がるる

柴舟の

しばしも立たぬ

我が思ひ

身をのみ託ち

深き江に

沈み果てなば

いかにかはせん』(二三丁ウ)

反歌

尋ね来し 常世の花の 陰に寝て

片敷く袖に 結ぶ恋草

恋草茂り行くまに、いとど露けし、暮れ
果つる秋の雲の行く末、時雨を誘ふ風の
身に沁みて、「心地も悩まし」と垂れ籠め
てうち臥しぬ。君は、いとあはれがり、様々に
慰むれど、ただ歌をのみ詠みてありけ」(二四丁才)
(挿絵)(二四丁ウ)
れば、徒然なる折節は、皆々集へ、
歌なん詠みて慰めける。

歌合

神無月半ば、時雨の空の降りみ降らずみ、
晴れ遣らぬ心の徒然に、「歌合して太郎
が心慰めん」と「山に寄する恋」といふ題
を出だし、判者は広沢に住む人を迎へ、右
左を分け、次第に勝ち負けありて、(二五丁才)
読人の難陳、判者の批判、様々にて、
おもしろきなどはおろかなり。数多の
歌は漏らしつ。豆太郎、左、君が傍離
れぬ綾子といふ女は右と番ひし。
二首の歌に、

左勝

豆太郎

消え遣らで 富士の煙に 立ち添ひぬ
下に焦がるる 海人の焚く火も」(二五丁ウ)

右

綾子

思草 積もり積もりて 塵泥の
山よりもなほ 深き心に

右の方、難じて曰く、「『寄山恋』と

いふに、富士の煙を詮に詠み

たらば、『寄煙恋』とも、題換へてん
める」。

左の方、陳じて曰く、「後京極殿の」(二六丁才)

歌に、『寄山恋』といふ題にて、

消え難き下の思ひは無き物を

富士も浅間も煙立てども

と詠まれたるは、証歌とはなるまじ
くや」。

左の方、難じて曰く、「山よりもなほ

深き心」と言ふ、却りて浅くや」。

右の方、始めより「左の歌、勝れり」(二六丁ウ)
と思ふ心にや、陳詞無し。

判に曰く、「右の歌、『積もり積もりて』の言葉、

耳に立つやうになん。また、左の難の事々、『山よりもなほ深き心』と

山の深きを言ひ掛けたる、常ならば、

其、許す方も侍らんが、大方

深きを深きと言葉に表し

たる、難無しとせず。左の歌に『(二七丁オ)

『富士の煙に立ち添ひぬ』と言ひ

定めたる心深し。『下に焦がるる』

煙なれども、消え遣らずは、富士の

煙にも立ち添はざらめやは。『消え遣ら

で』の五文字、心尽くされしとおぼゆ。

また、取り敢へず、証歌出だされたる。

左、極めたる勝なり」。

人々、太郎が勝ちたるを愛でつつ、日毎に『(二七丁ウ)

この事をのみ語り合へり。されど、思ひは

勝れども、慰むべくもあらず。余りに

物も食はず、徒然げなれば、君、橘の

実を手づから絞り、小さき銀の

提子に入れて遣る。

橘の みづから結ぶ 露零

香りを添へよ 君が心の

身に沁む露の情け、少し慰む心』(二八丁オ)

地しけり。紅葉の葉に返し書いて、

橘の 花ならねども 香るなり

君が心の 露の恵みは

「これや縁を結ぶ始めぞ」と、心

に嬉しく、心地も少しおこたり、君も

喜ぶ事、限り無し。

恋の山路

「いつまでかく思ひ焦がれん」と思ひ巡らし、』(二八丁ウ)

「長岡に年頃の者あり。我を育て

たる者なり。ゆかしく侍るなり。心地も

おこたりぬ。行きて見まほしく侍るなり」

と願ふ。君、「心のままにせよ」と女童、男な

ど添へて遣りぬ。

思ひ入る 恋の山路は 深くとも

栗求めて 越えざらめやは

かく思ひ続ける心、遣る方無く、桂の』(二九丁オ)

(挿絵)』(二九丁ウ)

里を出でて、長岡に至りぬ。三太に会ひ、先づ「父母はいかに。安く坐しますや。さぞ、己恋しとおぼすらん」。三太、「父母は、三年になるをいつかいつかと待ち給ふなり。さて、いかがし給ふぞや。疾く帰り給へ」と言ふ。太郎、事のありさま、「しかしか」と密かに語り、「我が身も神の恵みにて、丈高くなるべし。

されど、三年を過ぐす程なれば、いと待ち」(三〇丁才)

久し。また、桂の長者の娘を我が妻にせんと思へど、かかる姿の者には、妻合はすべしとも覚えず、我が丈の伸びんまでは、人も

待たじ。我、良く内の手引きせんに、この君を

盗み出だし、丹波路の山中まで具して

行け。後より我行きて、追ひ付かば、『怪し。神の

守り目あり』とおぼめき畏れて、君を

捨てて逃げ帰れ。顔に丹塗り、見知られぬ」(三〇丁才)

やうに構へよ。我は、君を伴ひ、山路に

迷ひたるやうにして、ここに来たり、宿り

て、君をしばし汝に預けなん。かかる事

なしてんや」と言ふ。三太、頷き、「それ、いと

易き事なり。良くしてん」と言ふ。太郎、嬉しく、夜を定め、時を契りて、立ち帰る。

かくて、その夜にもなりぬ。三太、夜うち更け

忍び入る。太郎、手引きして内へ入れ、君」(三二丁才)

が声立てぬやうに、衣ども取り掛けて

負ふて行く。君は、「こはいかなる事」と魂

も消ゆるばかりなり。三太は、ただ走り

に走り行く。太郎、善く善く見送り、返り

入りて、「君の見え給はぬ」とのめく。家の内、

驚き、男ども、かしここ尋ね求

むれど甲斐無し。太郎、言ふやう、「これは、人

の盗み出だし参らせたるならん。我、」(三二丁才)

尋ね参らせん」と言ひて走り出でぬ。か

ねて契りし山路に行きて見れば、残る夜も

明け渡り、木深き松陰にやすらひ居たり。

太郎、走り出で、君が傍へ寄るを見て、

三太、「あはや。守りの神の現れ給

ふよ」と言ひて、逃げ失せぬ。君は、我かの

心地して、涙塞き敢へず。されど、太郎が

疾く来たるに、力を得て、深き山路な」(三三丁才)

ども恐ろしげも無し。太郎、「ここは丹波路なるべし。早く長岡へ具して参らん」と行くに、道たどたどしく、あらぬ

方に行き惑ひて、日も暮れかかり、時雨さへ降り来ぬ。峰を越え、谷に下り、夜の紛れに山深き洞に至り着く。

岩間の花

いみじく恐ろしき洞の内に、『(三三丁ウ)

火影見えければ、太郎、言ふやう、「鬼の籠りたらば、火は焚かじ。山人の住みかならん。宿り借りてん。君はここに待ち給へ」と洞に入りて見れば、七十余りの姥

の火焚くなり。太郎、走り出でて、君に

「かく」と告ぐ。君、喜び、内に入り、「宿り貸し給へ」と言ふ。姥、驚き、「ここは人の

来る所にあらず。いづくへ行くとて来たり』(三三丁オ)

(挿絵) (三三丁ウ)

給ふぞ。ここは、恐ろしき鬼の住みかなり。

月花のやうなる人の、いかで宿り給はん。

この山を疾く越えて、人里へ出で給へ」と言ふ。君は、

いと悲しく、「さはいかにせん」と心惑ひす。太郎、姥が傍へ寄り、「我は、豆太郎といふ猛き者なり。たとひ、いかなる鬼もあれ、目にだに見えらば、辛き目見せん。姥前も鬼か人か」と言ふ。姥、見て、『(三四丁オ)

「やや。小さき人かな。されど、心は異に坐すぞや。姥は、鬼にはあらず。この洞の主

に夫を食はれたり」と言ふ。「さらば、その鬼を殺して、姥前のかたき取り

てんはいかに」。姥、いみじく喜び、「主

も誠の鬼にはあらず。盗人なり。姥

が夫、この洞に隠れ住み、後ろの

谷より水に流るる砂金を採り、世を』(三四丁ウ)

や過ぐべしに、盗人これを知りて、我が夫

を殺し、『金鑄せ^(注33) させん』と我をば殺

さず、また、『人に知られじ』と、鹿の角に馬の

鬣を付け、頭に頂き、身も

熊の皮もて包み、鬼の貌に拵へ

て、砂金採りに行き、常に夜深く

帰るなり。洞の辺り、見給へ。猪猿

を切り散らし、鬼の籠れるやうにし』(三五四才)
ければ、人も来ず。思へば、夫の仇なり。

今宵、酒飲ませ、宵臥せてんに、彼が眼
突きつぶし給はば、姥は、剣もて

刺し殺しなん。姫をば、奥の岩間に

隠し参らせん」と言ふ。太郎、「さらば、姥

前が仇殺し、宿せし恵み、報

いん」とて、鬼の臥し所に隠れ居たり。

君をば、岩間に隠しぬ。太郎』(三五四才)

「主には ありとな言ひそ 岩躑

躑 岩間隠れの 花の匂ひを」。君は

ただ我かの気色にて、「いかなる憂き目を

か見ん」と心肝も消え行くばかりな

り。姥は、「人々の、物欲しくやおはさん」と

粟の飯蒸して設けす。太郎、そこら

見巡らせば、砂金積み置きたり。心の

内、嬉しく、「我、この金を得て、長者に』(三六丁才)

なりてん。父母をも安らかに養ひ参

らせん。これぞ神の恵み」と大針小針

研ぎ、夜もやや更け行くまに、心弛

び無く、「今ぞ。今ぞ」と待つ。

鬼の醜草

暁近くなりて、すはや、鬼ぞ出で来
たる。何やらん、訛だみたる声にて姥

と物語りして、何気無く物食ひ、酒』(三六丁才)

飲み、「今宵は常よりも酔ひたり。休まう」

など言ひて、臥し所に入り、車の轟

くやうに軋して寝入りぬ。太郎、二

つの針をもて、やをら盗人の眼を

突く。主、跳ね返り(注34)、目を開けんとすれど、

血迸り、痛み忍び難く、「姥前、姥前、

火差し上げよ。眼を虫の甚く刺し

たるぞ」と言ふ。姥、剣抜きもて、「何を』(三七丁才)

(挿絵)』(三七丁才)

罵り給ふぞ」と言ひつつ、盗人の左の

胸を「ええ」と言ひて、仰け様に突き倒

す。「夫の仇なれば殺すぞ」と呼ぶに、

盗人は、「口惜し」とばかり言ひて、起きも上

がらずして死にけり。夜も明け行けば、姥

は、君を懇ろに労りぬ。太郎、君に

「これ見給へ。鬼の死したるは」とて、

「目に見えぬ 鬼の醜草 枯れ果てて」(三八丁才)

いかなる実とか ならんとすらん」とうち笑ふ。姥は、太郎に向かひ、「殿はいみじきゆゆしさなり。大きくして参らせたき事ぞ。

この山の奥に出で湯あり。世に知る人無し。

この湯に入れば、瘦せたる人も肥ゆと言へり。

殿も入りてみ給ひてんや」と言ふ。「さらば」とて、

日毎に入りぬ。日に添ひて、引き伸ばすやうに

なりて、丈高く、玉のやうなる男となりぬ。」(三八丁ウ)

姥、唐櫃より、小袖、直垂、取り出で着す。

「あは、良き殿かな。今よりこの砂金もて豊

かに榮え給へ。姥は、年老い^(注35)、齡傾

きぬ。ともかくも養ひて賜べかし」と、わり

なく聞こゆ。「いかでおろそかにせん」とて、善く善く

労りけり。かくて、豆太郎、先づ三太

に「かく」と語り、三太、喜び、乗り物

拵へ迎へぬ。太郎、君が手を取りて、『(三九丁才)

「君や知る 富士の煙に 紛へつつ

海人の焚く火の 下焦がれしを」と思ひ

入れたる様なりければ、君も、顔うち赤め、

「今ぞ知る 富士の煙に 立ち添ひし

人の思ひの 下焦がれとは。それより浅

からぬ仲となりぬ。やがて三太が家に入り、

引出物など整へ、桂の里へ急ぎ』(三九丁ウ)

て行きぬ。

帰る道芝

三年にもならで、故郷に帰る嬉しさ、

譬へん方無し。君を乗り物に乗せて、

我が身は馬に乗り、遠き山路を分け行く。太郎、

駒を止め、「君に物申す」と言ふに、乗り物止

めて、「何事のおはします」と聞こゆ。太郎、

「道芝の 道にも消えぬ 露の身は」(四〇丁才)

君が袂に 結ぶ白玉。君、取り敢へず、

「露ならで 光を添ふる 玉なれば

袖に包みて 帰る道芝」。やがて長者

に見参し、ありしやう、具に語り、

色々の引出物す。人々、出で集ひて、

喜び泣く事、限り無し。遂に、太郎

を長者が婿に定めぬ。それより太郎、

五条の御社に〔注36〕詣で、幣奉り、〕〔四〇丁ウ〕

「恵みありて この身いつしか 生ひ立ちぬ

花咲く春を なほ祈るなり」。駒を速めて、

京極へ行く。心の内、嬉しきなどは

おろかなるべし。

千代の松陰

三太は、いと疾く京極に行きて、「かく」と知ら

せければ、父母、いみじく喜び、走り

出でて見れば、清らなる男の、煌々しく〔四二丁オ〕

〔挿絵〕〔四二丁ウ〕

馬より降りて涙を流す。父母、「せめての

事に夢とのみ思ふ」と言へば、太郎、小

さき直垂と大針小針を出だしけれ

ば、いと嬉しく、「五条の御神の深き御

恵みなり」と幾度も額づく。恋しく、

行方おぼつかかなりし事など、物語

りし、もてはやす。「三太が夢のごとく、伏見

の桃園に家造りし、憂き事無く世を」〔四二丁オ〕

過ごさせ参らせん」と土器取りて、

その日は父母に酒を勧め、庭の小松を銚子
に付けて、太郎、

「若枝差す 緑も深く 仰ぐなり

いや増す高き 千代の松陰」。かくて家

造る営みをぞしける。

輝く朝日

日数経て、家も出で来ぬ。今年も暮れ、正月も〔四三丁ウ〕

過ぎ、「弥生二日〔注37〕は良き日」とて、父母を

具して、桃園の家に移り、君をも迎へ

て、上下、喜び合へり。三日は雛祭

す。常世の君、桃の花、一枝折りて、

「紅に 輝く朝日 曇らじな

幾三千年か 匂ふ桃園」と詠みて、

寿く。それより太郎は、「朝日の長者」とて、

世に隠れ無く、男女の子、あまた出で来て、」〔四三丁オ〕

〔挿絵〕〔四三丁ウ〕

行く末長く栄えぬ〔注38〕。太郎、ただ父母に

よく仕へ、夫婦睦ましく、心おほど

かにして、よく人を恵みけり。常々言ひ

けるやうは、「男は、物習へば、自ら良き

理をも知る。ただ、女ばかり、幼けなき
より物学ぶ事の無ければ、かたじけなく 好しき

心のみ勝りて、『物のあはれ』も知らず

なり行く、いと悲し。故に、物縫ひ習ひ、〔四四丁才〕

手書き習ひ、男文字など大方寛

え、やまと文、神代の巻、源氏物語、

伊勢物語、代々の集を読み、あはれる

歌を覚え、物妬み物羨みせず、

心を細やかにして、人の諫めに付き、親

に仕へ、夫に仕へ、舅姑に仕へて、

何事も心のままに振る舞ふ〔注39〕べからず。

人を憎めば、人に〔注40〕憎まる。言ふまじき事〔四四丁ウ〕

言ひ、すまじき事すれば〔注41〕、いとほしたなし。

人心 何はにつけて 善し悪しを

波の立ち居に 思ひ分けてよ

年頃睦まじくしたる人、年頃久しく

出で入りしたる人など、忘るべからず。

幾年か 古き軒端に 行き来して

主忘れぬ 燕かな

心の同じ友あらば、身の善し悪しを糺し、〔四五丁才〕

〔挿絵〕〔四五丁ウ〕

互ひに良き道に誘ふべし。

小夜千鳥 浦伝ひして 月影の

隈無き方に 友誘ふなり

親に仕へ、はらからに睦ましきは、

言ふに及ばず、なべて年老せ〔注42〕る者をば

あはれむ心あらまほしけれ」と、女、童

女に教へけるとぞ。

豆太郎物語 終はり

真道一読了〔四六丁才〕

享保九年甲辰

八月二十三日〔四六丁ウ〕

注1 歌合の両歌は、一行目一字下げ、二行目二字下げの書式。

2 朱書にて和歌の句末を示すカギ括弧様の書き入れあり。

3 「誠」に墨書にて「まこと」とのふりがなあり。本文と

同筆とおほしい。

4 注2に同じ。

5 「ゝ」としたが「く」にも見え、紛らわしい。

6 「め」は小字にて「見」と「ぐ」の字間の右傍。

7 「神」にミセケチ様の朱点あり。但し、線対称となる

三七丁表の七行目「」の朱が濃く、その色が移った可能性が高い。

8 「き」に朱書にて濁点のみ書き入れあり。

9 注2、注4に同じ。

10 「く」「ゝ」(濁点) それぞれに朱書にてミセケチあり。

11 注2、注4、注9に同じ。

12 注2、注4、注9、注11に同じ。

13 注2、注4、注9、注11、注12に同じ。

14 「そて」右傍に朱書にて「そて」との書き入れあり。ミセケチの印等は無し。虫損ゆえとおぼしいが、本文の判読は可能。

15 注2、注4、注9、注11、注12、注13に同じ。

16 注2、注4、注9、注11、注12、注13、注15に同じ。

17 「ぐ」左傍に朱書にて「さ」との書き入れあり。虫損ゆえとおぼしいが、本文の判読は可能。

18 左傍に朱書にて「行」との書き入れあり。虫損ゆえとおぼしい。

19 「ゑ」右傍に朱書にて「へ」との書き入れあり。ミセケチの印等は無し。

20 「ぐ」左傍に朱書にて「さ」との書き入れあり。虫損は

無し。

21 右傍に朱書にて「につ」との書き入れあり。虫損ゆえとおぼしい。

22 注2、注4、注9、注11、注12、注13、注15、注16に同じ。

23 左傍に朱書にて「いく」との書き入れあり。虫損ゆえとおぼしい。

24 注2、注4、注9、注11、注12、注13、注15、注16、注22に同じ。

25 三文字分程度の虫損あり。いずれも判読困難であるが、「さ」直下、則ち一文字目部分は「か」とあったと思われる、二文字目部分の右傍には朱書にて「え」とあるとおぼしく、三文字目部分は、続く「」とはほぼ同位置まで、終筆部らしき墨書が伸びていることが窺える。

26 左傍に朱書にて「より」との書き入れあり。虫損ゆえとおぼしい。

27 右傍に朱書にて「いせ」との書き入れあり。虫損ゆえとおぼしい。

28 「の」は小字にて「ゝ」と「集」の字間。

29 「集」に墨書にて「しう」とのふりがなあり。本文と同

筆とおぼしい。

30 左傍に朱書にて「あは」との書き入れあり。虫損ゆえとおぼしい。

31 原本「見へ」を「見え」と解した。

32 原本「矢つま」を「屋妻」と解した。

33 原本「かねいせ」を「金鑄せ」と解した。

34 「主は寝返り」とも解せようが、文脈・文勢に鑑み、「主、跳ね返り」とした。

35 原本「おひ」を「老い」と解した。

36 文脈より「に」との本文を立てた。

37 文脈より「目」との本文を立てた。

38 注25に照らし、試みに「栄えぬ（さかえぬ）」との本文を立てた。

39 原本「ふるまう」を「振る舞ふ」とした。

40 文脈より「人に」との本文を立てた。

41 文脈、及び、四四丁裏「人を憎めば」の対とおぼしきことより「すれば」との本文を立てた。

42 注35に同じ。但し、「年老^{おい}」とした。

※本稿は、二〇二二・二〇二三年度科研費（基盤研究（C））・

課題番号・二二K〇二五六一）による成果の一部である。また、二〇二二年度ノートルダム清心女子大学学長裁量経費教育改革研究助成金（「ノートルダム清心女子大学特殊文庫目録」改訂に向けての資料整理および調査・研究」（代表者「当時」・野澤真樹））による成果の一部でもある。

（なかい けんいち／本学教授）

キーワード・黒川文庫・「珍本」・翻刻